南島原市文化財調査報告書　第12集

大 苑 遺 跡

―大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書　第12集

大 苑 遺 跡

―大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査―

２０１８

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は，南島原市有家町大苑地区の県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴い，発掘調査を実施した大苑遺跡の調査報告書です。

中世から近世にかけての製鉄関連の遺跡，「踏鞴坂（たたらざか）遺跡」として古くから知られていましたが，事業に伴う範囲確認調査で縄文時代，弥生時代，古墳時代，中世，近世の複合遺跡であることが確認され，「大苑遺跡」と名称を変更しました。本調査では，弥生時代中期の甕棺墓，中世と考えられる柱穴列などが確認されました。

この地に古い時代から人々の生活の跡が時代を超えて残されていることを伝え，守っていくことは今に生きる我々の責務です。本書が郷土の歴史教育，研究のために広く活用されることを願います。

最後になりましたが，大苑地区埋蔵文化財発掘調査事業について格別のご理解とご協力賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成30年９月30日

南島原市教育委員会　　教育長　永田　良二

例　　言

1　本書は，大苑遺跡（長崎県南島原市有家町大苑名字大苑，字東田原所在）の発掘調査報告書である。

2　調査は，長崎県が事業主体である大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴って実施した。

3　現地調査は，有家町教育委員会（現南島原市教育委員会）が主体となって実施した。また，本書作成に係わる整理調査は，長崎県南島原市教育委員会が主体となって実施した。整理調査の体制・担当は，以下のとおりである。

整理調査

調査主体

南島原市教育委員会	教育長	永田　良二
	教育次長	深松　良蔵
	文化財課長	松本　慎二
	文化財課文化財班長	末永　　透

調査担当

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	副参事（学芸員）	荒木　伸也
		副参事（学芸員）	本多　和典

4　現地調査における写真撮影は，荒木が行った。遺構配置図及び個別遺構実測図の作成は，㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託し，一部を荒木が行った。航空写真の撮影は，㈲スカイサーベイ九州に委託した。また，自然科学分析は，㈱古環境研究所に委託した。

5　遺物の洗浄・注記などの基礎整理は，古賀千恵美，照平八千代，長谷川彩，松尾恵美子が行った。遺物の実測は，佐藤三夏，高木加奈代，水田尚子，本多が行い，一部を㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。拓本は，岩田貴子が行った。製図は，壹岐美由紀が行った。遺物の写真撮影は，本多が行った。

6　本書に関する遺物，図面，写真等は，南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。

7　本書の執筆は，荒木・本多で分担し，目次に担当者を記した。編集は，本多による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　位置と環境（荒木）……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査の概要（荒木）……4
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　調査の経過……4
　第３節　調査組織等……4
　第４節　調査区の設定と調査の方法……6

第Ⅲ章　調査成果……6
　第１節　土層（荒木）……6
　第２節　遺構（荒木）……7
　第３節　遺物（本多）……14
　第４節　自然科学分析（株式会社　古環境研究所）……18
　第５節　まとめ（荒木）……22

挿 図 目 次

第１図　有家町内遺跡地図……3
第２図　調査区位置図……5
第３図　土層図……6
第４図　遺構配置図……8
第５図　土坑実測図……9
第６図　土坑内出土遺物……10
第７図　甕棺墓実測図……11
第８図　甕棺墓内出土土器……11
第９図　土坑墓実測図……12
第10図　集石遺構実測図……13
第11図　出土土器・陶磁器……15
第12図　出土石器……16

表　目　次

第１表　遺構内出土土器観察表……12
第２表　遺構内出土石器観察表……12
第３表　出土土器・陶磁器観察表……17
第４表　出土石器観察表……17

図 版 目 次

図版１　遺跡上空から雲仙方面を望む（南から）……25
図版２　調査区合成写真……26
図版３　平成14年度調査区（東から）
平成17年度調査区（北から）……27
図版４　柱穴列１～６
土坑検出状況（南西から）……28
図版５　土坑内遺物出土状況（北西から）……29
図版６　甕棺墓検出状況（南東から）
土坑墓検出状況（西から）……30
図版７　土坑墓内遺物出土状況（西から）……31
図版８　集石遺構検出状況……32
図版９　集石遺構（南東から）
被熱礫（南東から）
遺物出土状況（南東から）……33
図版10　柱穴列４遺物出土状況
調査風景ほか……34
図版11　土坑内出土遺物
甕棺墓内出土土器……35
図版12　出土土器・陶磁器……36
図版13　出土石器……37

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

島原半島の南東部に位置する南島原市は，平成18年３月31日に南高来郡深江町，布津町，有家町，西有家町，北有馬町，南有馬町，口之津町，加津佐町の８町が合併し誕生した。北は島原市，西は雲仙市と接し，南東は有明海に面している。面積は170.11㎢，平成30年８月末の人口は46,292人である。

半島の中央部には，普賢岳（1,359m），国見岳（1,347m），妙見岳（1,333m）などの雲仙山系が連なり，平成の普賢岳の噴火活動で山頂部に溶岩ドームが形成され，平成新山（1,483m）として長崎県の最高峰となっている。北部の深江町から西有家町までは扇状地，緩やかな丘陵が多いが，北有馬町から南部の加津佐町までは山間部が多く，海岸線まで急峻な地形が迫っているところが多い。

大苑遺跡は南島原市有家町大苑名字大苑，字東田原に位置する。雲仙山系を中心に有明海に向かって延びる丘陵や台地と，これらを浸食するいくつもの河川があり，この中の丘陵の標高約25～50mの緩傾斜地に広がる遺跡である。

第２節　歴史的環境

南島原市内では現在190の遺跡が存在し，有家町内には56の遺跡（うち９遺跡はキリシタン墓碑群などの石造物）がある。縄文時代の遺跡が多く見られるが，実際に調査された遺跡が少ないため，詳細な内容等は分かっていない。以下，有家町内の遺跡について時代ごとに述べていく。

旧石器時代を主体とする遺跡の発掘調査事例は市内ではなく，現地踏査での表採や他の時代の調査で遺物包含層に混在して遺物が確認された事例がある。町内では長崎県教育庁文化課（以下，県文化課）が実施した農免農道建設に伴う下木場遺跡（後に通野遺跡と名称変更）の発掘調査で，三稜尖頭器が出土しており，土地利用が旧石器時代には始まっていたと想定されている。

縄文時代では晩期を主体とする遺跡が多い。主な遺跡としては，西鬼塚支石墓・石棺群，堂崎遺跡，蒲河遺跡があげられ，いずれも県文化課が調査を実施している。西鬼塚支石墓・石棺群の範囲確認調査では，支石墓と箱式石棺が確認され，一部はマリンパークありえ内に移設復元されている。

港湾関係事業で調査が実施された堂崎遺跡，蒲河遺跡は，有明海沿いの潮間帯に立地する遺跡で，晩期土器のほか，多量の礫器，石錘が出土しており，貝類の採取，加工を主とした活動の場と考えられている。堂崎遺跡調査時に遺跡西側の海岸においても同様な礫器が多数確認され，石田遺跡として登録されている。前述の通野遺跡では早期の押型文土器，晩期土器が出土しており，近年，市道改良工事に伴い南島原市教育委員会文化財課が調査した東大窪遺跡では，縄文時代早期，後・晩期の土器や，台石，叩石，磨製石斧，玉などが出土し，後・晩期と考えられる廃棄土坑を確認している。

弥生時代の遺跡として堤遺跡，貝森遺跡があげられる。『有家町郷土誌』によると有家川下流域にある堤遺跡では中・後期の合口甕棺や貝製の装飾品が出土している。また，海中干潟の貝森遺跡では弥生時代後期土器や双角状礫器が出土したほか，縄文時代の前期，中期，晩期土器も出土したとある。いずれにしても，昭和30年代の工事中の発見記録や表面採集によるもので，発掘調査が実施されていないため詳細は不明である。

平成14年には海岸整備事業に伴い県文化課が貝森遺跡の範囲確認調査を実施しており，摩耗した土

器が出土しているが，貝森川の河口にあり流れ込みと考えられている。

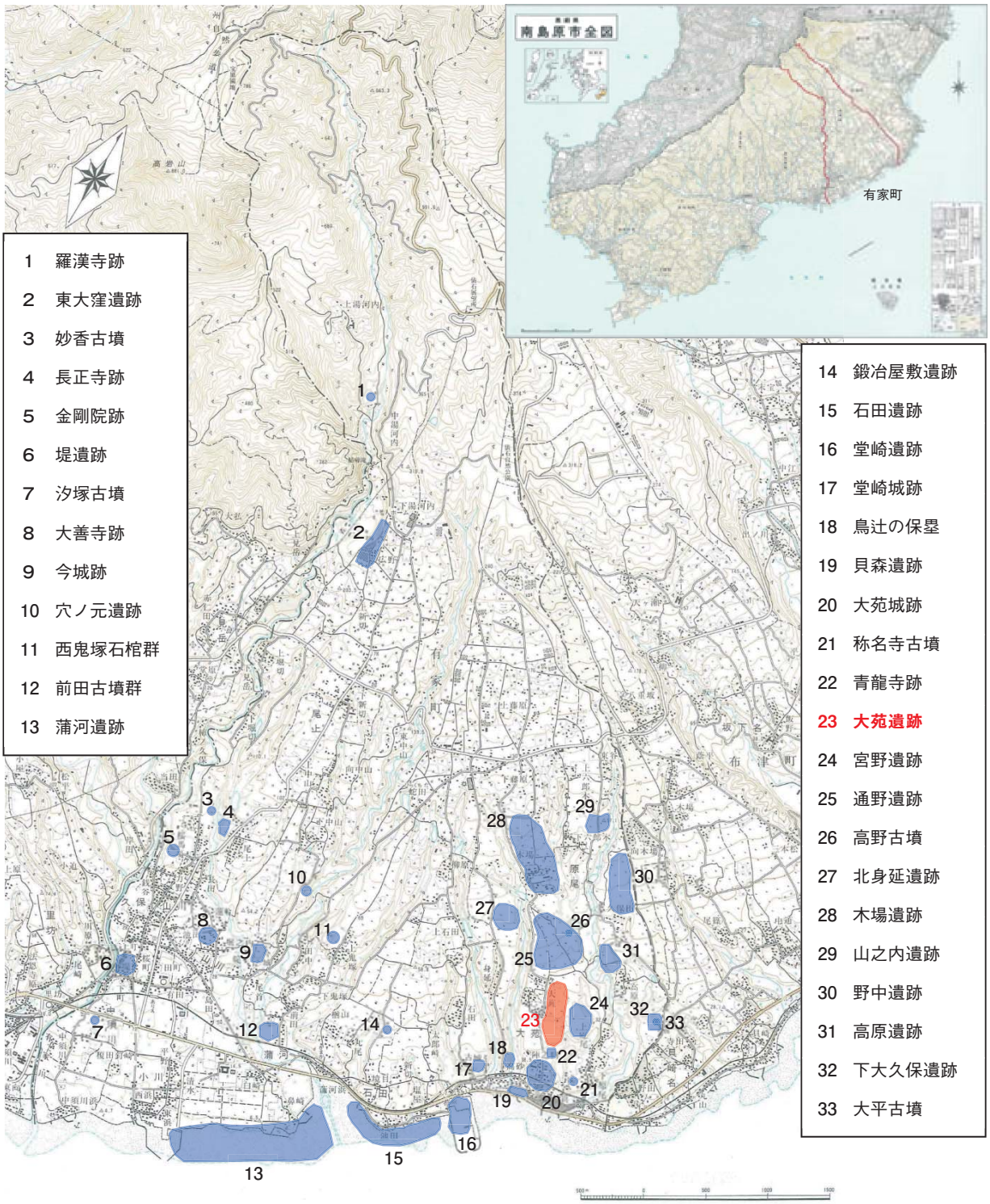
古墳時代の遺跡として高野古墳，大平古墳，妙香古墳，称名寺古墳，前田古墳群，汐塚古墳の６つの古墳が『長崎県遺跡地図』に掲載されている。『有家町内における文化財の分布調査』によると，高野古墳は昭和30年代に九州大学によって調査され，土師器，須恵器，鉄鏃，ガラス玉が出土したとある。昭和50年代には有家町史跡調査委員会が大平古墳，妙香古墳の調査を行い，大平古墳では須恵器片を表採している。妙香古墳では遺物を確認していない。前述の３つの古墳は，調査着手時には既に半壊しており，盗掘されていたとのことである。称名寺古墳では金環が出土したとされる。前田古墳群，汐塚古墳について詳細は不明である。

明確な古代の遺跡は確認されていない。中世では古記録に残る寺院跡として，羅漢寺跡，青龍寺跡，長正寺跡，金剛院跡，大善寺跡がある。平成16年に有家町教育委員会（以下，町教委）が羅漢と呼ばれる石像が祀られている周辺を中心に羅漢寺跡の内容確認調査を実施したが，遺構，遺物は確認できなかった。城館跡として堂崎城跡，大苑城跡，今城跡，鳥辻の保塁があり，昭和50年代に町教委が堂崎城跡の発掘調査を実施し輸入陶磁器類が出土したとするが，遺物の所在は現在不明である。また，詳細な調査は実施されていないが，鉄滓が表採できる穴ノ元遺跡や鍛冶屋敷遺跡，踏鞴坂遺跡が中世から近世にかけての製鉄関連の遺跡として知られていた。

近世ではキリシタン墓碑が42基確認されている。明治35年に郷土史家の森豊造氏が発見した花十字紋の中須川キリシタン墓碑は，長崎県下キリシタン墓碑発見の端緒となった。

【参考文献】

吉永重人・篠原徳之編　1980　『有家町内における文化財の分布調査』有家町の文化財報告第１集　有家町教育委員会
有家町郷土誌編纂委員会編　1981　『有家町郷土誌』　有家町
長崎県教育委員会編　1994　『長崎県遺跡地図』島原市・南高来郡地区　長崎県文化財調査報告書第111集　長崎県教育委員会
村川逸朗　1997　『西鬼塚支石墓・石棺群』有家町埋蔵文化財調査報告書第３集　有家町教育委員会
古門雅高編　2004　『下木場遺跡』長崎県文化財調査報告書第179集　長崎県教育委員会
本多和典・酒井希望編　2018　『東大窪遺跡』南島原市文化財調査報告書第11集　南島原市教育委員会



第１図　有家町内遺跡地図（Ｓ＝１/50,000）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

有家町内では平成６年頃から複数の基盤整備事業計画があり，これらに伴い県文化課は町内の現地踏査を行い，事業計画との調整を図っていた。その中で，平成11年に大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）が認可され，大苑地区土地改良区が設立された。事業計画は約60ha である。町教委は長崎県島原振興局（以下，振興局）の依頼を受け，大苑地区試掘調査，範囲確認調査を実施している。これらの調査に踏鞴坂遺跡範囲確認調査が含まれており，遺跡範囲が拡がること，縄文，弥生，古墳，中世，近世の複合遺跡であることが確認されたため，踏鞴坂遺跡から大苑遺跡へ名称を変更した。

試掘調査，範囲確認調査結果をもとに遺跡の取扱いについて開発部局と保護部局と協議，調整を重ね，計画区域内に所在する大苑遺跡，宮野遺跡，通野遺跡の３遺跡の本調査が必要と判断した。基本方針として整備事業と営農の都合上，工事着工前年度までに現地調査を完了することとした。

第２節　調査の経過

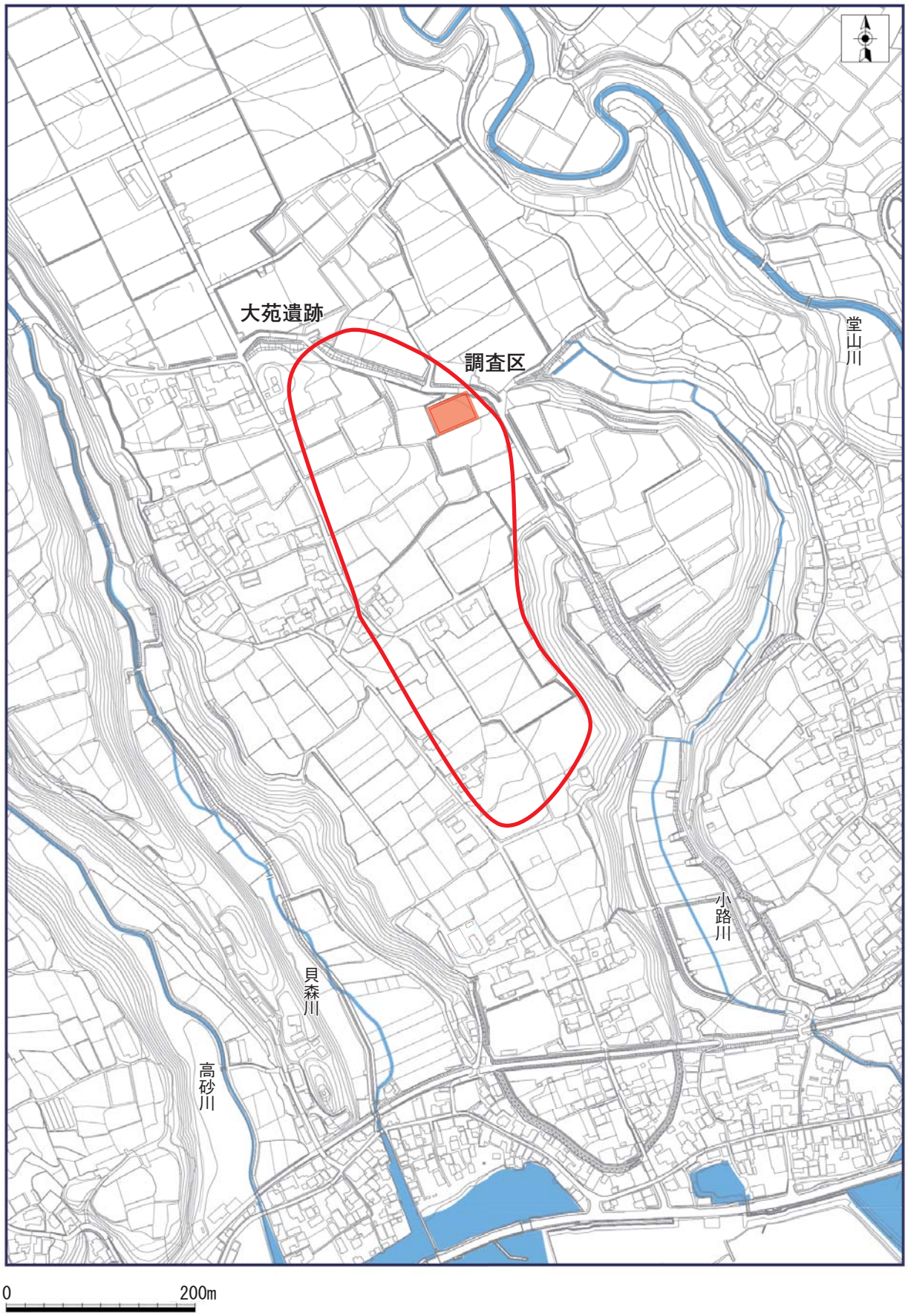
平成14年度に有家町役場農林水産課から町教委へ，大苑遺跡内の道路及び排水路計画区域の約700㎡の調査依頼があった。調査面積を縮小するため，本調査に先行して詳細な範囲確認調査を行い，面積を約300㎡に縮小し本調査を実施した。

平成17年度には事業計画に変更が生じたとして，振興局から町教委へ約800㎡の調査依頼があった。14年度調査区の隣接地であったため，調整した結果，約500㎡の本調査を実施した。

第３節　調査組織等

大苑遺跡発掘調査の調査組織等は，以下のとおりである。

平成14年度	調査体制	有家町教育委員会	教育長	松島　吉郎
			教育次長	田出　義正
			社会教育係長	野原　文博
			社会教育係	荒木　伸也（調査担当）
	調査期間	平成14年10月15日～11月７日		
	調査面積	286㎡		
平成17年度	調査体制	有家町教育委員会	教育長	松島　吉郎
			教育次長	田出　義正
			課長補佐	野原　文博（兼社会教育係長）
			社会教育係	荒木　伸也（調査担当）
	調査期間	平成17年10月11日～11月30日		
	調査面積	509㎡		



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/6,000）

第４節　調査区の設定と調査の方法

道路，排水路及び切土計画区域を調査の対象とし，平成14年度，17年度とも小型バックホウを用いて表土剥ぎを実施した。調査区全体は東西方向に約32m，南北方向に約25m の長方形となる。表土剥ぎ後，人力による掘削，遺構検出を行った。各年度とも遺構検出及び掘り下げ後，必要に応じて写真撮影，遺構実測を行った。実測には日本測地系の座標を用いた。ラジコンヘリによる航空写真撮影を実施し，14年度及び17年度調査区の合成写真を作成した。

第Ⅲ章　調査成果

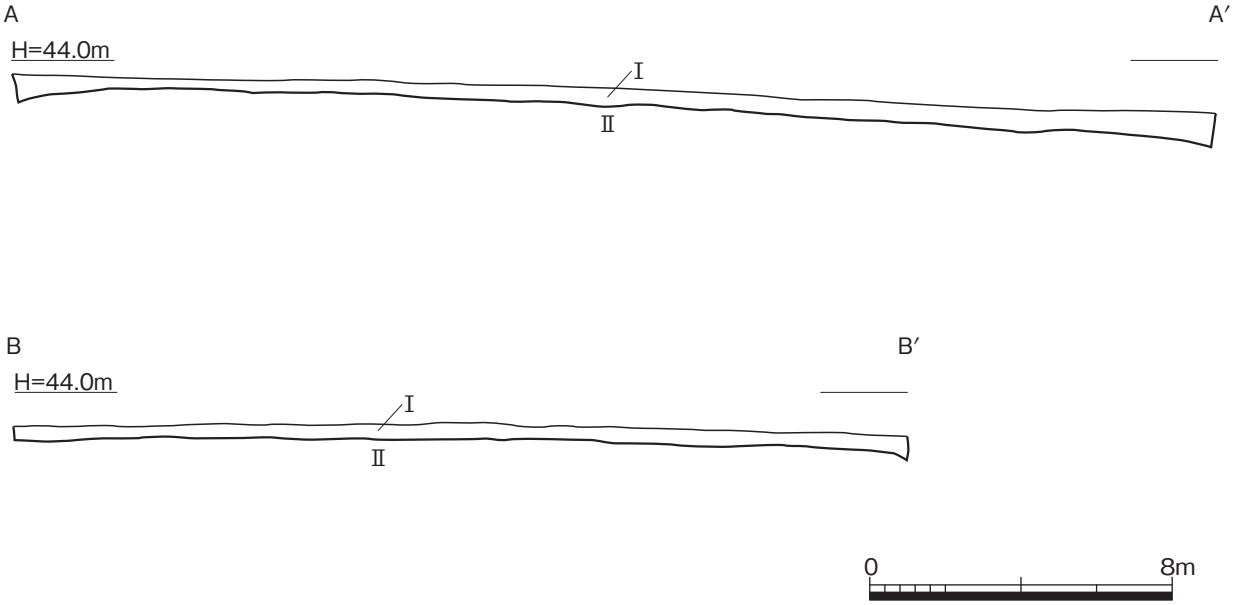
第１節　土層（第３図）

調査によって確認された層序は，以下のとおりである。

Ⅰ層　褐灰色土（表土，耕作土）

Ⅱ層　明黄褐色土

Ⅰ層は表土（耕作土）である。約30～40cmの耕作土と，長年の耕作により締め固められた約５～10cmの硬化土も含めて表土として取り扱った。明確な遺物包含層は確認できず，Ⅱ層上面，表土直下の明黄褐色土が遺構検出面である。検出面では，農業用リッパーを使用した地盤割り痕を確認でき，大きく撹乱が及んでいることが判明した。特に調査区内の境界付近での撹乱が目立ち，表土として扱う部分が１m を超えるところもある。



第３図　土層図（Ｓ＝１/200）

第２節　遺構

明黄褐色を呈するⅡ層の上面が遺構検出面である。ピット，柱穴列，土坑，甕棺墓，土坑墓，集石遺構を確認した。

柱穴列（第４図）

多くのピットを検出し，その中で柱穴列を６列確認できた。すべて西－東方向の並びである。検出面の標高は，西から東へ及び北から南へと低くなっている。

列１は，直径約50cmの柱穴が４基並び，西から東方向へそれぞれの柱間はおよそ300cm，250cm，250cmを測る。検出面の標高は，西から東へ42.9～42.6mで，４基の平均の深さは90cmを測り，３基の柱穴から中世の遺物が出土した。

列２は，柱穴列１と同じ規模の直径約50cmの柱穴が４基並び，西から東方向へそれぞれの柱間はおよそ300cm，250cm，270cmを測る。検出面の標高は，西から東へ標高42.9～42.6mである。東端の柱穴１基の深さは40cmであるが，他の３基の平均の深さは110cmを測る。

列３は，直径約50cmの柱穴が３基並び，西から東方向へそれぞれの柱間はおよそ200cmを測る。検出面の標高は，西から東へ42.8～42.7mで，３基の平均の深さは50cmを測る。

列４は，直径約50cmの柱穴が３基並び，西から東方向へそれぞれの柱間はおよそ200cmを測る。検出面の標高は，西から東へ42.8～42.6mで，３基の平均の深さは45cmを測り，１基の柱穴から中世の遺物が出土した。

列５は，直径約40cmの柱穴が４基並び，西から東方向へのそれぞれの柱間はおよそ200cm，180cm，240cmを測る。検出面の標高は，西から東へ43.0～42.8mで，４基の平均の深さは30cmを測る。

列６は，直径約30cmの柱穴が４基並び，西から東方向へのそれぞれの柱間はおよそ200cmを測る。検出面の標高は，西から東へ43.0～42.8mで，４基の平均の深さは25cmを測る。

土坑（第５・６図）

長軸149cm，短軸103cmを測る不定形な遺構であり，土坑とした。明黄褐色土に黒色土が混ざる堆積土を５cmほど確認し，粗製深鉢と台石が出土した。

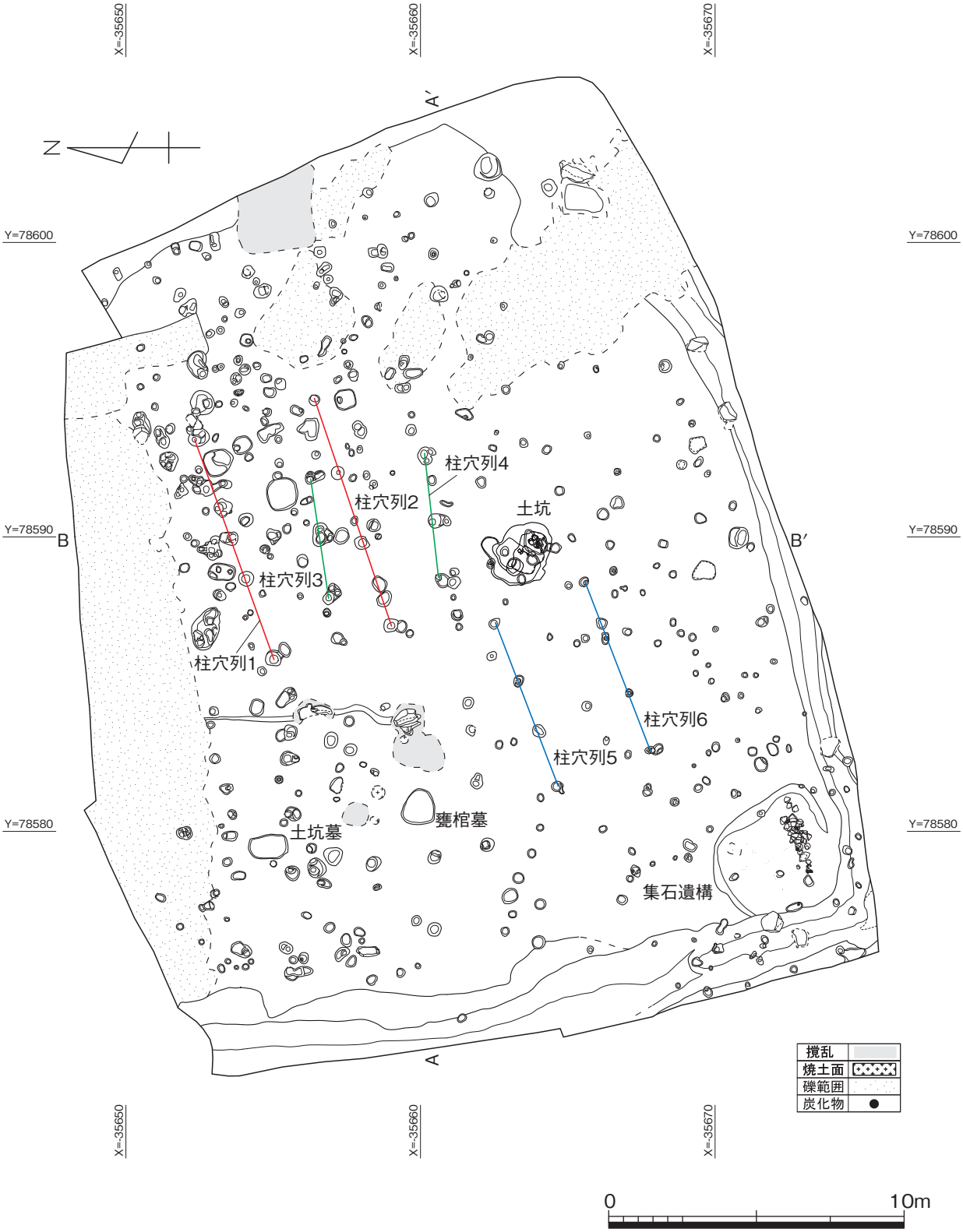
１は，縄文時代晩期の粗製深鉢の資料である。屈曲部の最大径は36.2cm，底径9.8cmを測る。貝殻条痕調整を施し，底部は上げ底で張り出す。

２は，砂岩製の台石である。両面とも滑面を有し，片面に凹部があり，打撃による破損もみられる。砥石との併用品である。

甕棺墓（第７・８図）

主軸角度はＧ．Ｎ－109°－Ｇ．Ｅで概ね東向きである。墓坑の平面形は１辺が約120cmの隅丸の三角形で，断面形は掘り込み傾斜が急な「Ｕ」字状を呈する。甕の単棺である。甕棺の上半分は圧壊していて状況はよくないが，甕は接合によってほぼ全体を復元できた。

１は，鋤先状口縁の甕である。口径は34.4cm，復元底径8.7cm，器高は36.5cmを測る。口縁はやや垂れ下がり気味にのび，外面は縦方向のハケ目調整，内面はナデ調整を施す。



第４図　遺構配置図（S＝１/200）

土坑墓（第９図）

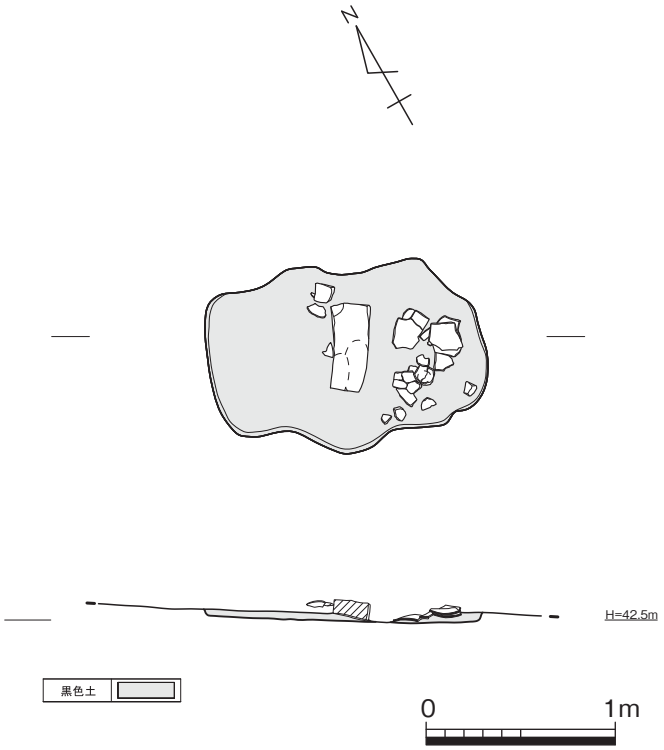
主軸角度はＧ．Ｎ－354°－Ｇ．Ｅで北向きである。墓坑の平面形は隅丸の長方形で長さ134㎝，幅80㎝，深さ17㎝を測る。断面形は掘り込み傾斜が急な「Ｕ」字状を呈し，床面はほぼ水平である。風化がはげしく取り上げできなかったが，骨片を確認した。回転糸切りの痕を残す，３枚の土師器の小皿（**第11図８～10**）を供献土器としている。

集石遺構（第10図）

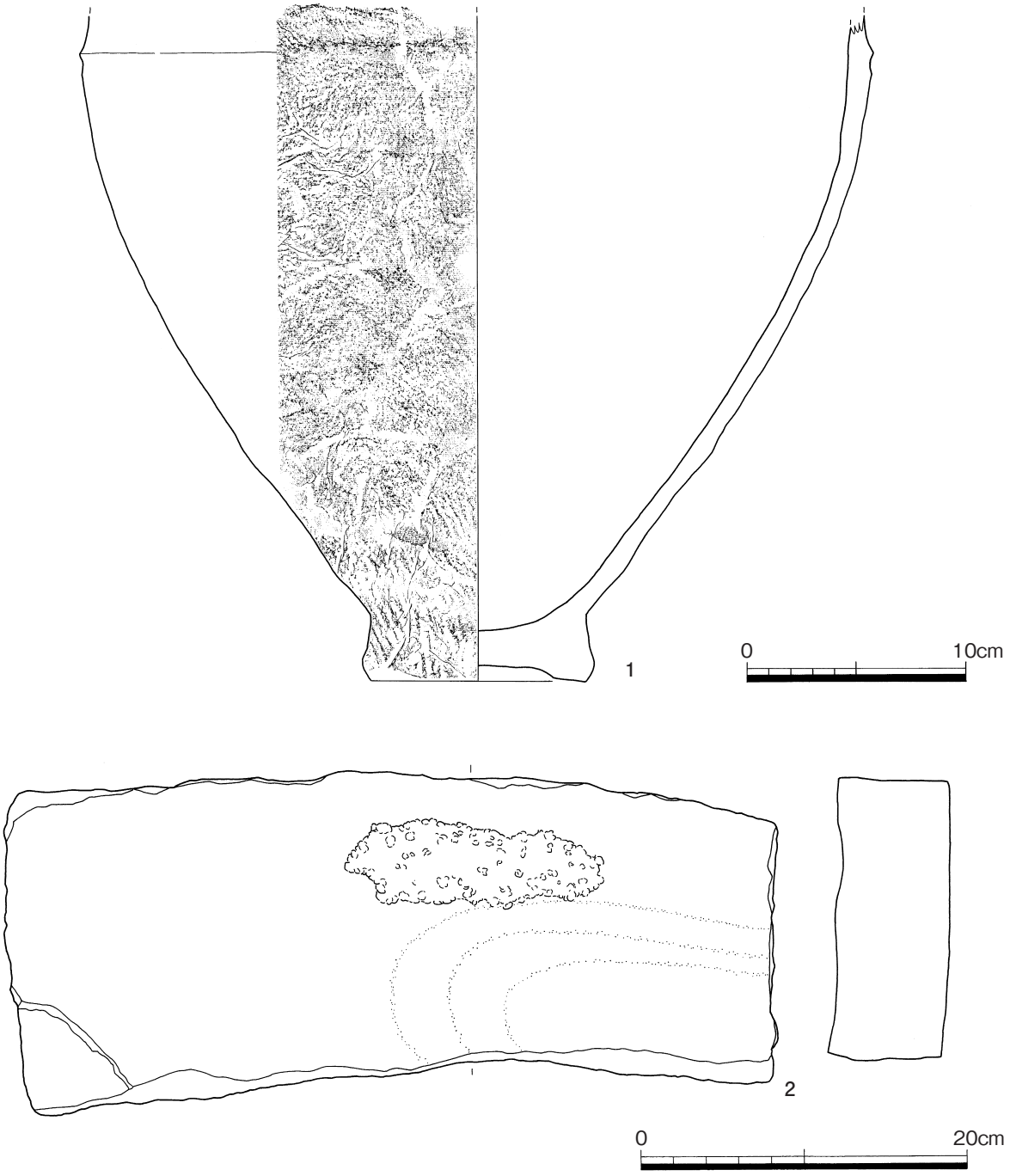
調査区の南西角で，人頭大の礫が４個並んだ状態で検出した。耕作に支障のある礫を除去し，深部へ埋め込んだ攪乱，あるいは過去の小規模な畑地整備の石積みの一部の可能性があると判断し掘り下げた。長軸が約５ｍ，短軸の最大長が約3.5ｍの卵形，あるいは一辺が約４ｍの隅丸の三角形を呈するような不定形な凹みに，拳大～人頭大の礫が集められた状態であった。

遺構内からは焼土塊，炭化物，鉄滓，台石が出土したが，時期を判断できる遺物は出土しなかった。集積された礫の中には，亀の甲羅状にクラックが入る被熱礫を数個確認した。また砥石を転用した台石（**第12図１**）が遺構床面で出土した。

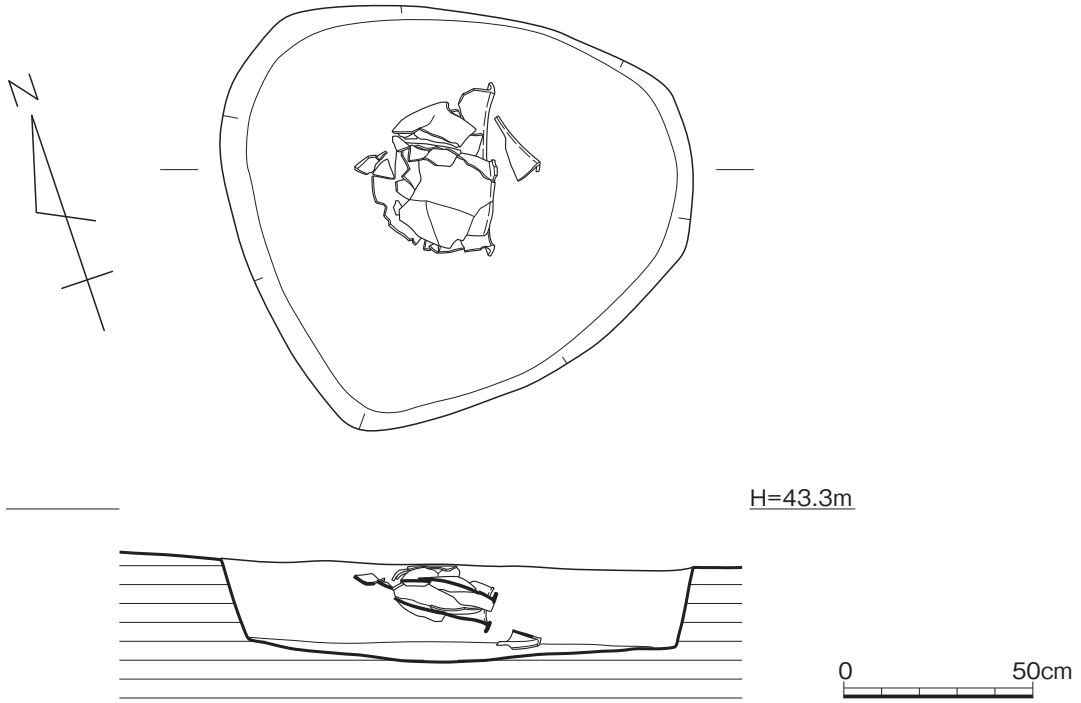
集石遺構内一括，土層観察用ベルト及び礫直下からそれぞれ採取した炭化物３点について，平成17年度に自然科学分析を実施した。分析内容は，樹種同定及び放射性炭素年代測定である。第４節で分析結果を報告する。



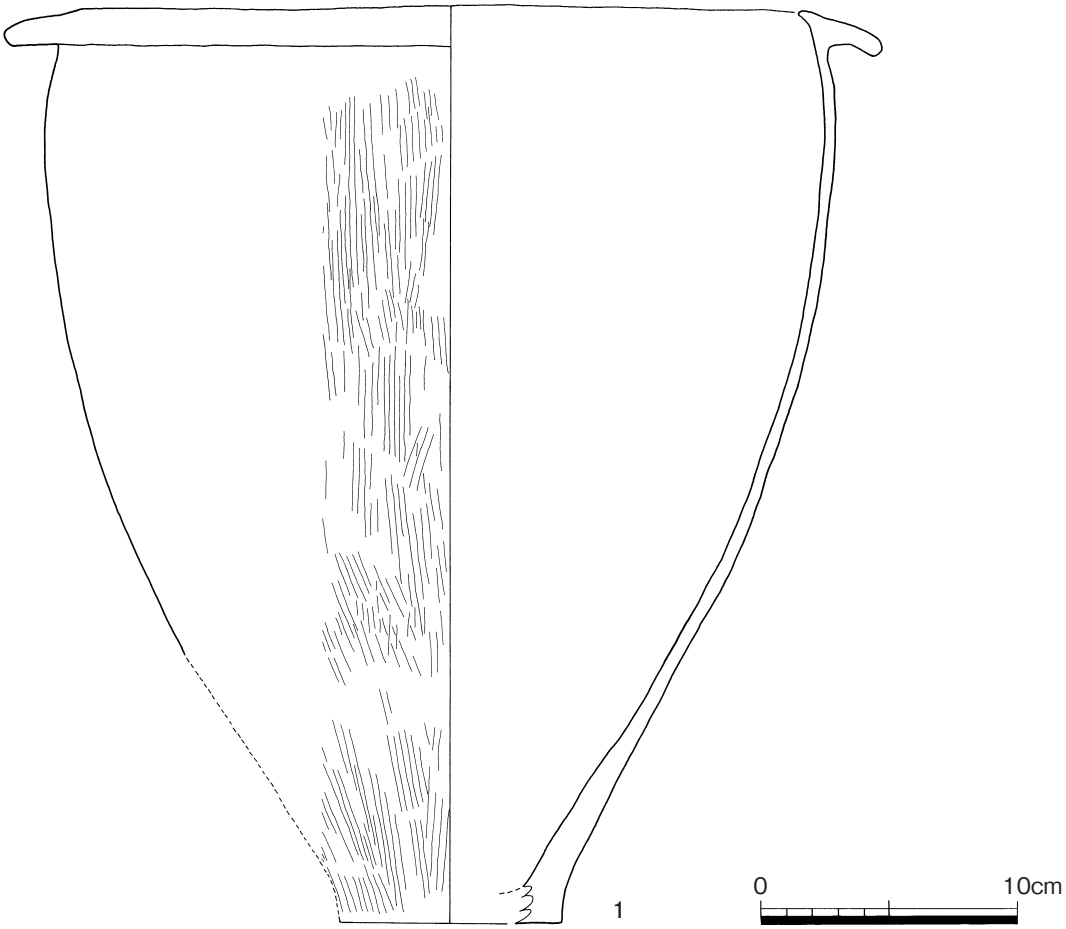
第５図　土坑実測図（Ｓ＝１/40）



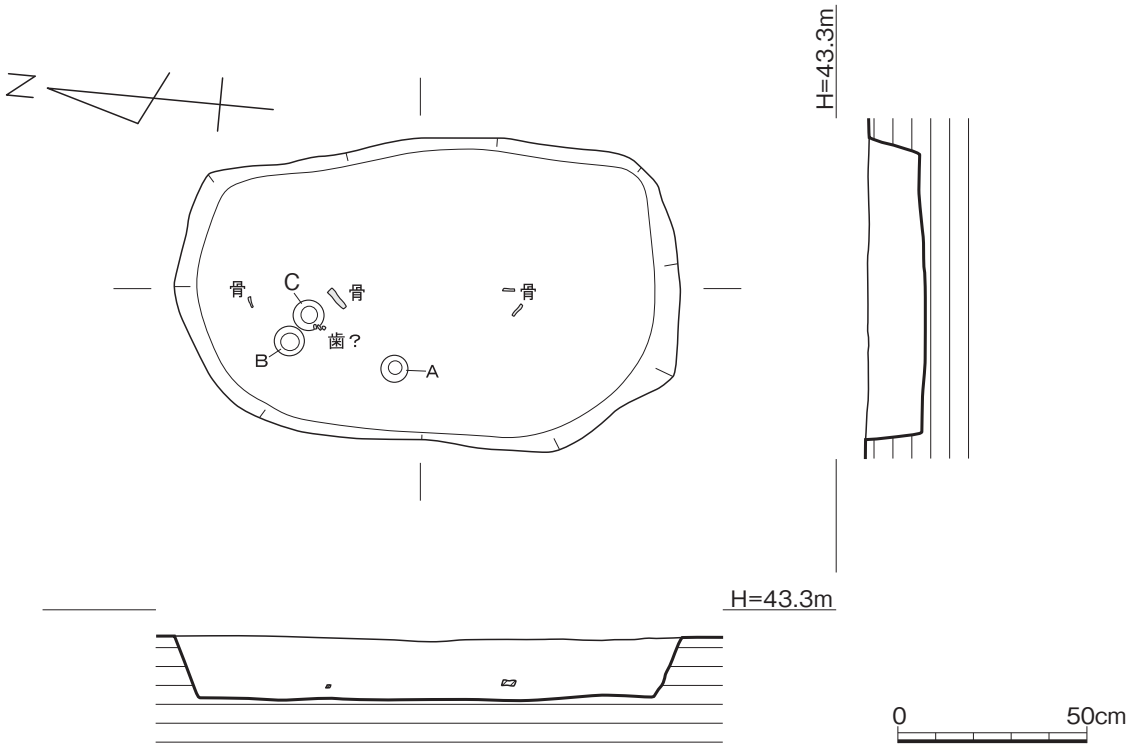
第６図　土坑内出土遺物（１：Ｓ＝１/３，２：Ｓ＝１/４）



第７図　甕棺墓実測図（Ｓ＝１/20）



第８図　甕棺墓出土土器（Ｓ＝１/３）



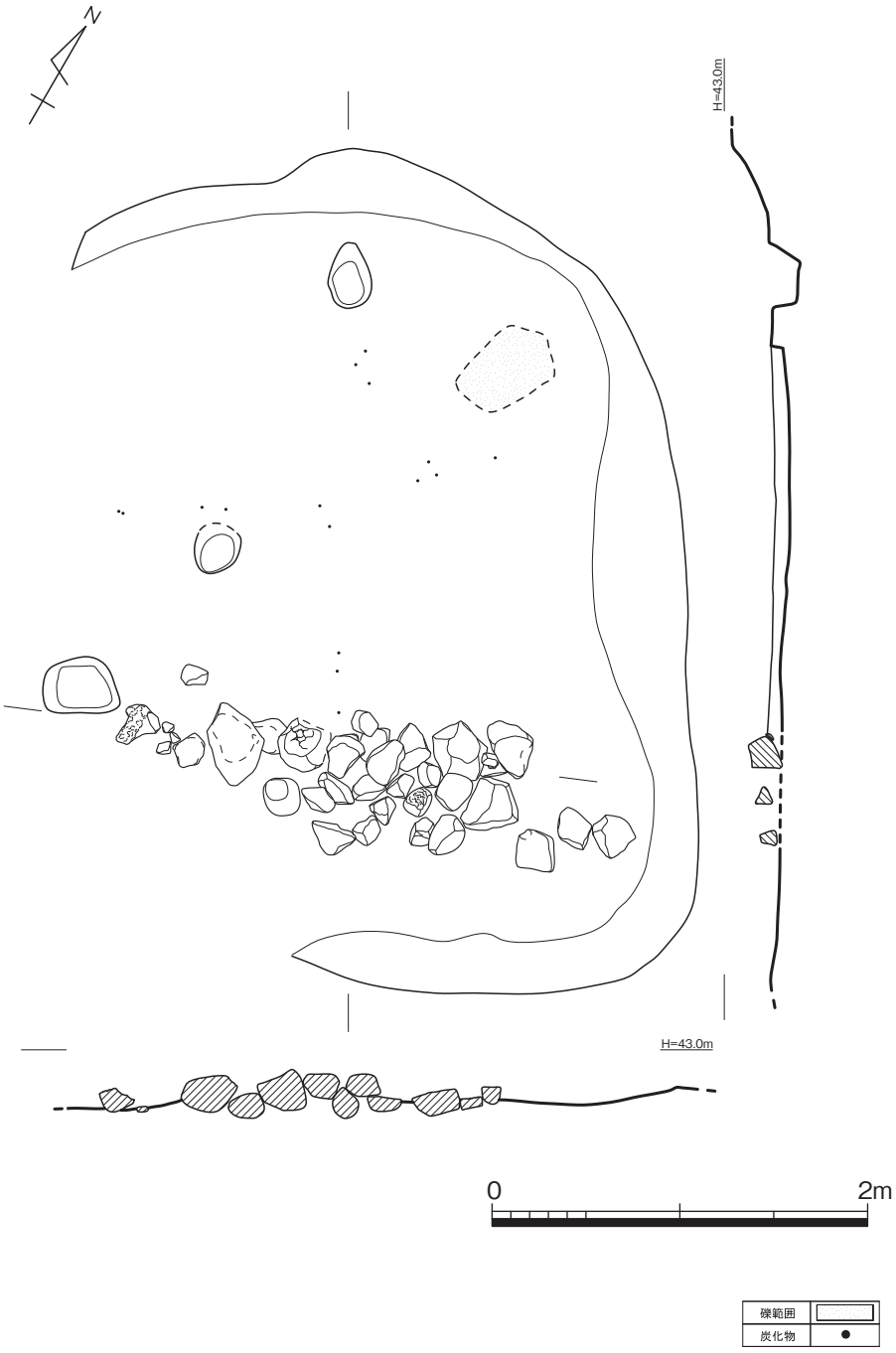
第 9 図　土坑墓実測図（S ＝ 1 /20）

第 1 表　遺構内出土土器観察表

図	番号	器種	遺構	文様・調整		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
6	1	深鉢	土坑	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい赤褐･橙	浅黄橙・褐灰	角閃石・長石・石英	
8	1	甕	甕棺墓	ハケ目	ナデ	橙	灰黄褐	長石・石英・雲母	

第 2 表　遺構内出土石器観察表

図	番号	器種	遺構	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
6	2	台石	土坑	砂岩	47.3	20.5	7.6	13200.0



第10図　集石遺構実測図（S＝1/40）

第３節　遺物

土器・陶磁器（第11図）

１～５は縄文時代晩期の資料である。１～３は粗製深鉢である。１・２は口縁部の資料で，どちらも内外面ともに貝殻条痕調整を施す。３は底部の資料で，底径9.6cmを測る。４は精製浅鉢で，大きく外反する長い頸部をもつ。５は網目の組織痕土器である。

６・７は弥生時代中期の土器である。６は甕の口縁部の資料で，断面先細りとなる外側への張り出しは上向きで，肥後系であろう。７は甕もしくは壺の胴部の資料で，外面にはハケ目調整が残り，３条の三角突帯をめぐらす。

８～18は中世の資料である。８～10は底面に回転糸切りの痕を残す土師器の小皿で，土坑墓内からの出土である。８は口径7.0cm，底径4.6cm，器高1.9cmを測る。９は口径6.6cm，底径4.8cm，器高1.8cmを測る。10は口径7.0cm，底径5.5cm，器高1.6cmを測る。

11は白磁の皿である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施しており，やや灰色がかった釉には貫入が入る。復元底径は4.2cmを測る。

12～15は青磁の碗である。12は内面に劃花文を施す。14・15は見込に花文を入れる。14は生焼けで，胎土は橙色を呈する。15は高台内と畳付に砂粒の付着が認められる。

16～18は青花である。16は碗，17・18は皿である。16は外面に鳥文と雲文，内面に圏線を描く。17はいわゆる碁笥底をなし，外面には圏線で区画して波濤文を，内面には見込に芭蕉葉文を描く。18は見込に玉取獅子を描く。

石器（第12図）

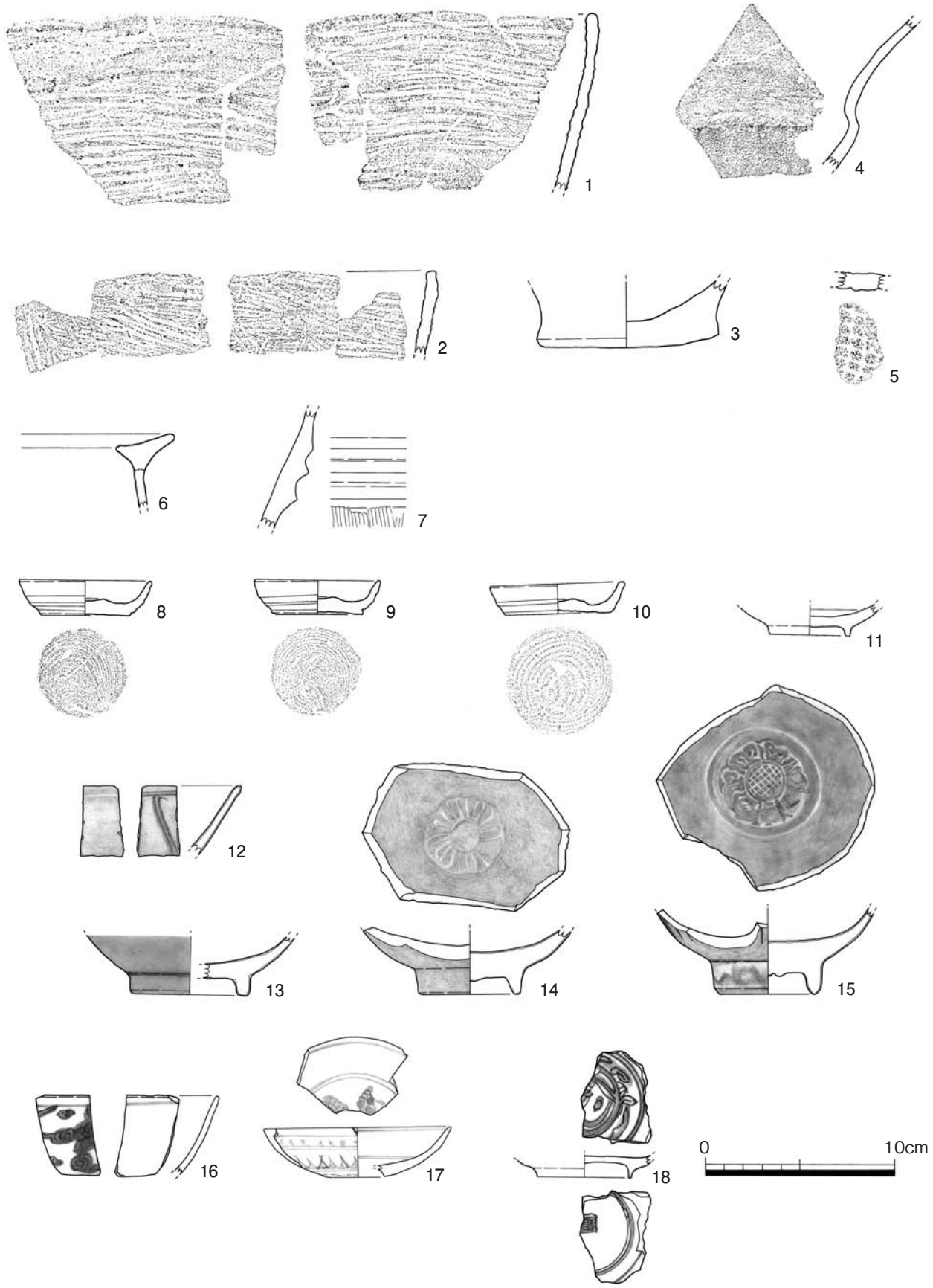
１は砥石を転用した台石で，集石遺構内からの出土である。片面に滑面を有し，打撃による破損が見られる。２は砥石で片面に滑面を有する。１・２はともに砂岩を素材としている。

３は砂岩製の磨石である。表裏の両面に滑面をもつ。４は扁平な形状を呈した砂岩製の叩石である。側面には使用による摩滅が見られる。

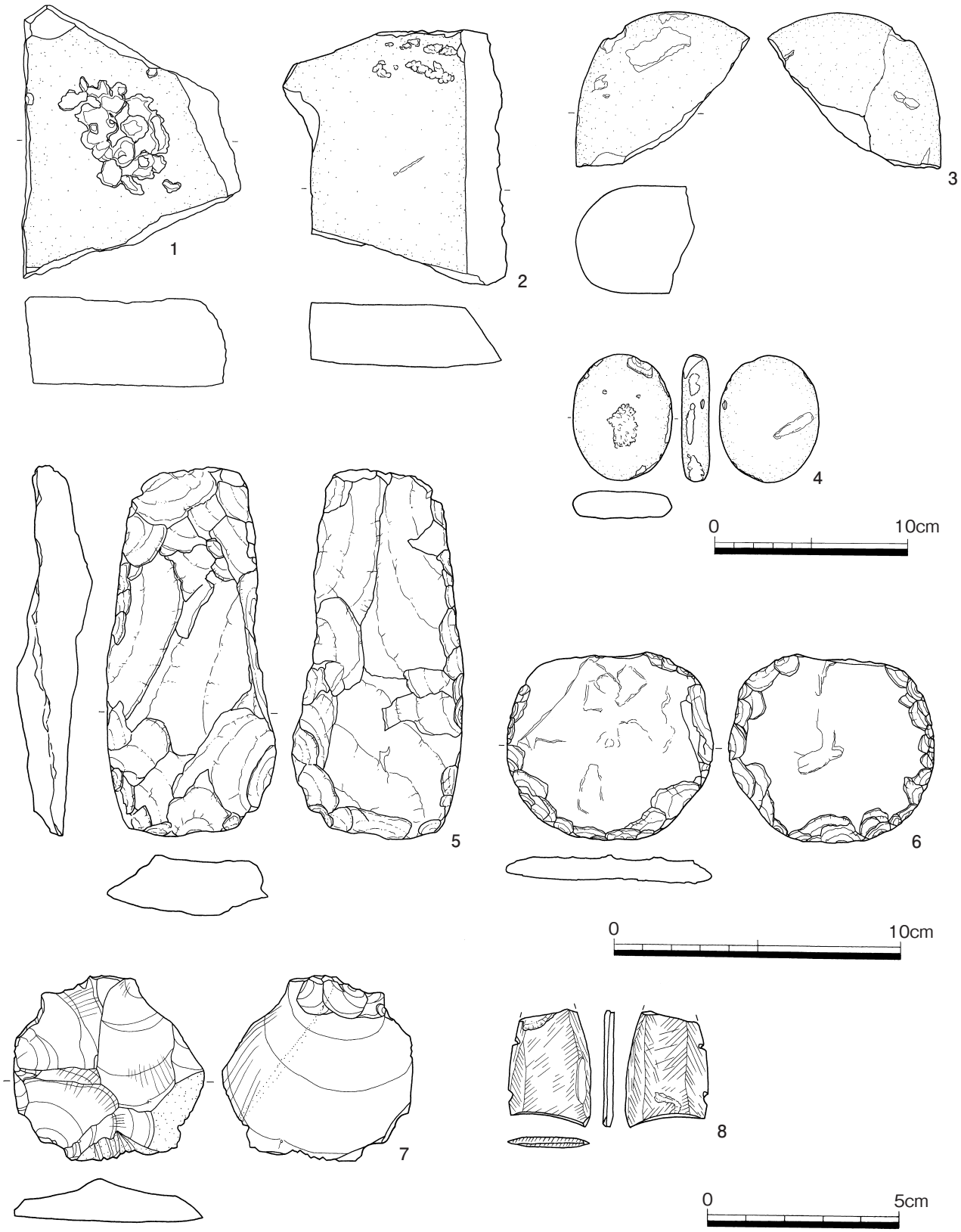
５は安山岩を素材とする打製石斧である。６は砂岩製の円盤状石器である。一部欠損するが，周縁をめぐる整形剥離が認められる。

７は漆黒色黒曜石製の比較的大型の剥片で，末端には自然面を残す。

８は頁岩製の磨製石鏃である。全体に丁寧な研磨を行い，基部は弧状に仕上げる。



第11図　出土土器・陶磁器（S＝1／3）



第12図　出土石器（1～4：S＝1/3，5・6：S＝1/2，7・8：S＝2/3）

第３表　出土土器・陶磁器観察表

図	番号	器種	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
11	1	深鉢	Ⅰ	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい橙	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英	
	2	深鉢	Ⅱ	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄褐・褐灰	黒	角閃石・長石・石英	
	3	深鉢	Ⅰ	ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	角閃石･長石･石英･赤色粒子	
	4	浅鉢	Ⅰ	研磨	研磨	にぶい黄橙	灰黄褐	角閃石・長石・石英	
	5	浅鉢	Ⅱ	組織痕（網目）	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	6	甕	Ⅰ	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	長石・石英・雲母	
	7	甕 or 壷	Ⅰ	ハケ目	ナデ	浅黄橙	にぶい黄褐	長石・石英	
	8	小皿		回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	長石・石英	土坑墓内出土（A）
	9	小皿		回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	長石・石英	土坑墓内出土（C）
	10	小皿		回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	明赤褐	長石・石英	土坑墓内出土（B）
	11	皿	Ⅰ	－	蛇ノ目釉剥ぎ	灰白	にぶい黄橙・灰白	－	貫入有
	12	碗	Ⅰ	－	圏線・劃花文	オリーブ灰	オリーブ灰・暗オリーブ灰	－	
	13	碗	Ⅰ	－	－	灰緑	灰緑	－	
	14	碗		－	花文	にぶい黄褐	にぶい黄橙	－	柱穴列４出土
	15	碗		連弁文	花文	オリーブ灰	オリーブ灰・灰白	－	柱穴列４出土
	16	碗	Ⅰ	圏線・鳥文・雲文	圏線	明青灰・暗青灰	明青灰・青灰	－	
	17	皿	Ⅰ	圏線･列点文･波濤文	圏線・芭蕉葉文	明緑灰・青灰	明青灰・青灰	－	
	18	皿	Ⅰ	圏線	圏線・玉取獅子	明青灰・青灰	明青灰・暗青灰	－	

第４表　出土石器観察表

図	番号	器種	石材	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
12	1	台石	砂岩		14.2	11.3	4.6	1103.9	集石遺構内出土
	2	砥石	砂岩	Ⅰ	11.7	13.2	3.3	701.6	
	3	磨石	砂岩	Ⅰ	8.1	9.0	5.6	465.8	
	4	叩石	砂岩	Ⅰ	6.6	5.1	1.5	76.3	
	5	打製石斧	安山岩	Ⅰ	12.9	6.0	2.6	185.6	
	6	円盤状石器	砂岩	Ⅰ	6.6	7.2	1.0	64.1	
	7	剥片	黒曜石	Ⅰ	4.9	5.0	1.0	24.9	
	8	磨製石鏃	頁岩	Ⅰ	3.0	2.1	0.2	2.2	

第４節　自然科学分析

大苑遺跡における自然科学分析（樹種同定及び放射性炭素年代測定）

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．樹種同定

１．はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は，大苑遺跡から出土した炭化材３点である。試料の詳細を表１に示す。

３．方法

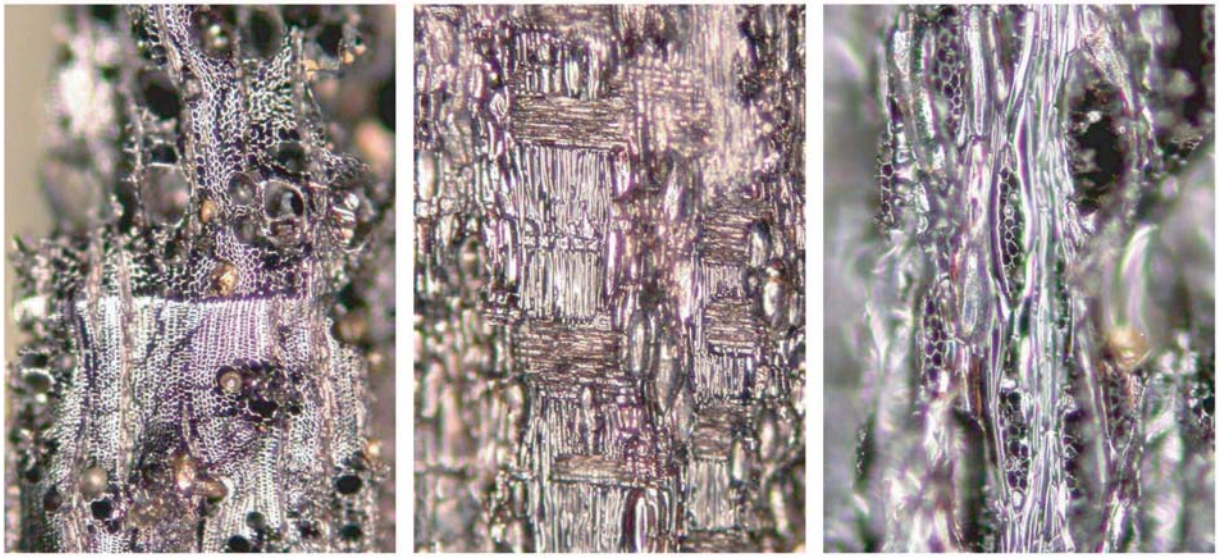
試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し，落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表１に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

No.	遺構名等	結果（学名／和名）	
No.1	集石遺構	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
No.2	集石遺構（南ベルト）	diffuse-porous wood	散孔材
No.3	集石遺構（礫直下）	Lauraceae	クスノキ科

表１



横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.4mm　接線断面 ：0.2mm

No.1　集石遺構　クスノキ

写真１

クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科　**写真１**

横断面：中型から大型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には，大きく膨れ上がったものも存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには，大きく膨れ上がったものが見られる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは，関東以西の本州，四国，九州，沖縄に分布する。常緑の高木で，通常高さ25m，径80cm ぐらいであるが，高さ50m，径５ｍに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く，保存性が高く芳香がある。建築，器具，楽器，船，彫刻，ろくろ細工などに用いられる。

クスノキ科　Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には，クスノキ，ヤブニッケイ，タブノキ，カゴノキ，シロダモ属などがあり，道管径の大きさ，多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが，本試料は炭化などの影響からか，道管径以外の点が不明瞭なことから，クスノキ科の同定にとどめた。なお，本試料は道管径の大きさから，クスノキ科のうちの，シロダモ属，クロモジ属と思われる。

散孔材　diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で，多列幅である。

以上の形質より散孔材に同定される。本試料は小片で広範囲における観察が困難であることから，散孔材の同定にとどめた。

５．所見

分析の結果，大苑遺跡の炭化材は，クスノキ１点，クスノキ科１点，散孔材１点と同定された。

クスノキは西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。クスノキ科も温帯下部の温暖な暖温帯に分布し，照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242

Ⅱ．放射性炭素年代測定

１．試料と方法

試料名	遺構名・地点・層準等	種類	前処理・調整	測定法
№1	集石遺構	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
№2	集石遺構（南ベルト）	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS
№3	集石遺構（礫直下）	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

（１）^{14}C 年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C 比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は，国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

（２）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正^{14}C 年代値

δ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C 値を－25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}C の詳細な測定値，およびサンゴの U-Th 年代と^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは，補正^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68％確率）と2σ（95％確率）は，補正^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

2．測定結果

試料名	測定№ （Beta−）	^{14}C 年代 （年 BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C 年代 （年 BP）	暦年代（西暦） （1σ：68％確率，2σ：95％確率）
№1	212254	100±40	−27.2	60±40	交点：AD1950 1σ：AD1710〜1720，1880〜1950 2σ：AD1680〜1730，1810〜1950
№2	212255	430±40	−26.6	400±40	交点：AD1460 1σ：AD1440〜1500 2σ：AD1430〜1530，1560〜1630
№3	212256	320±40	−25.1	320±40	交点：AD1530, 1560，1630 1σ：AD1500〜1640 2σ：AD1460〜1660

3．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№1の炭化物では60±40年 BP（1σの暦年代で1710〜1720，1880〜1950年），№2の炭化物では400±40年 BP（1σの暦年代で AD1440〜1500年），№3の炭化物では320±40年 BP（1σの暦年代で AD1500〜1640年）の年代値が得られた。

このうち，№1では放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅がかなり大きくなっているが，これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p. 1-36.

第５節　まとめ

今回，大苑地区県営畑地帯総合整備事業に伴い，道路，排水路及び切り土計画部分の約800㎡の本調査を実施した。耕作の影響が大きく，明確な遺物包含層は確認できない。Ⅱ層上面の遺構検出面は削平されているが，ピットや柱穴列，土坑，甕棺墓，土坑墓，集石遺構など，多くの遺構を確認した。

西－東方向に並ぶ柱穴を６列確認し，柱穴列１と２，３と４，５と６で，計３棟の掘立柱建物跡を考えたが，それぞれの南－北方向の柱穴間隔が広いと判断し，柱穴列とした。列１と４は，出土遺物から中世と考えられる。

縄文時代の遺構として土坑を確認した。不定形な土坑から縄文時代晩期土器と重量約13kgの台石が出土し，作業場的な空間と考えられる。

弥生時代の遺構として，中期須玖式の小児甕棺墓を１基確認した。甕は圧壊しているものの，ほぼ完形に接合，復元できた。この他に明確な弥生時代の遺構は確認できない。

中世の遺構として，底面に回転糸切りの痕を残す，土師器の小皿を供献土器とする土坑墓を１基確認した。小皿３枚は伏せた状態で出土し，骨の残存状況や位置から，口元に置かれたと推測できる。

集石遺構の時期を判断できる遺物はないが，覆土から焼土塊，鉄滓，炭化物が出土した。また床面に近い覆土は硬化している。焼土塊の大きさは２～５㎝程度のものが８点あり，鉄滓の形は様々であるが５㎝程度のものが２点，１～３㎝程度のものが30点ある。炭化物の年代測定結果を参考にすると，中世から近世の遺構の可能性がある。

大苑名字大苑には「たたら」,「たたらざか」と呼ばれる古い地名がある。この周辺の調査記録は無いが，鉄滓が散在していたことから，中世から近世にかけての製鉄関連の遺跡,「踏鞴坂遺跡」として知られていた。今回の調査では鉄滓を集積した痕跡もなく，鉄を生産する遺構を確認できていないため想定の域であるが，集石遺構は排滓場の可能性もあると考える。

今回の調査で確認した遺構，出土遺物について，今後，周辺遺跡との比較検討を行いたい。

図　　版

遺跡上空から雲仙方面を望む（南から）

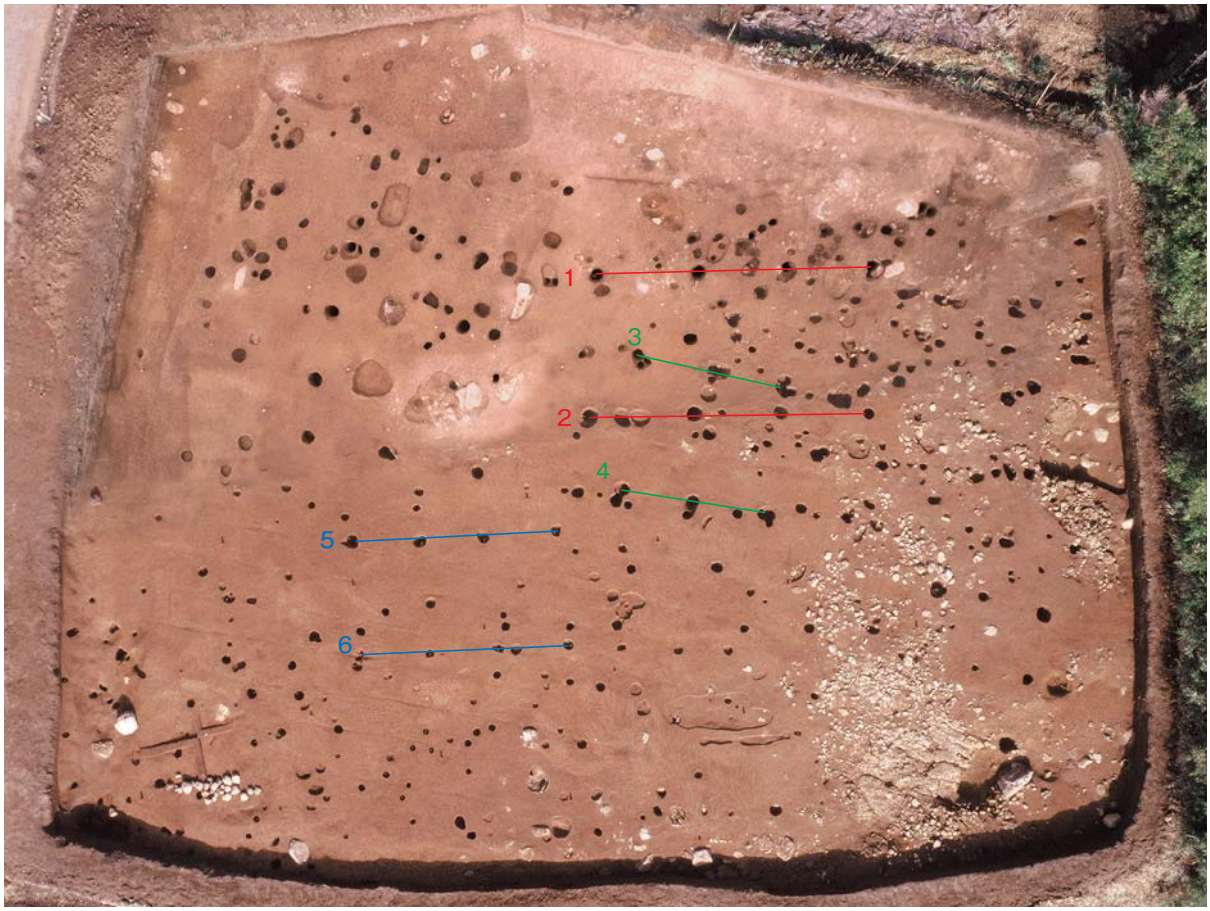
図版 2

調査区合成写真

平成14年度調査区（東から）

平成17年度調査区（北から）

図版 4



柱穴列 1 ～ 6

土坑検出状況（南西から）

土坑内遺物出土状況（北西から）

土坑内遺物出土状況（北西から）

図版 6

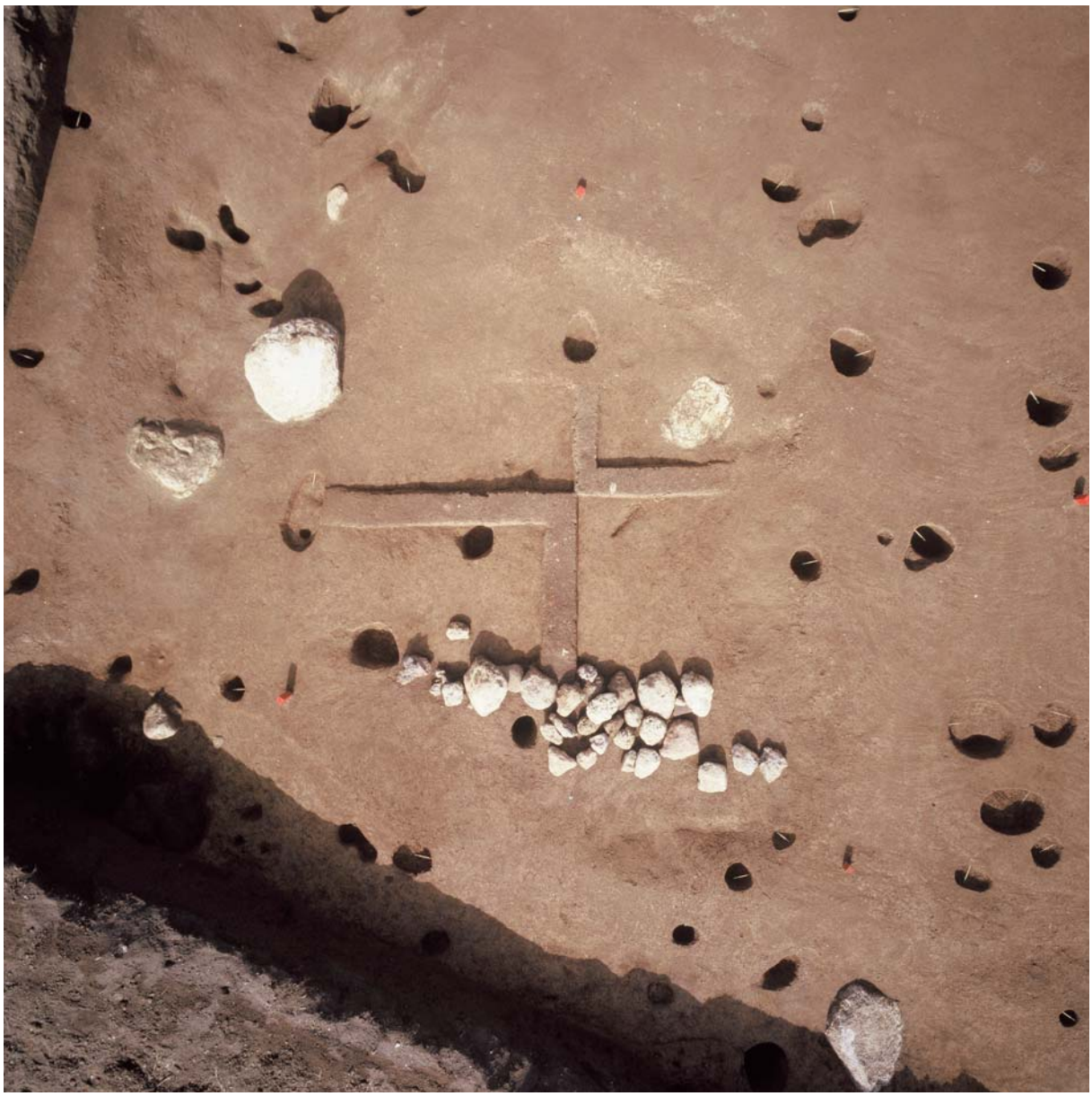
甕棺墓検出状況（南東から）

土坑墓検出状況（西から）

土坑墓内遺物出土状況（西から）

土坑墓内遺物出土状況（西から）

図版 8



集石遺構検出状況

集石遺構（南東から）

被熱礫（南東から）

遺物出土状況（南東から）

図版10

柱穴列 4 遺物出土状況

表土剥ぎ

調査風景

農業用リッパー痕

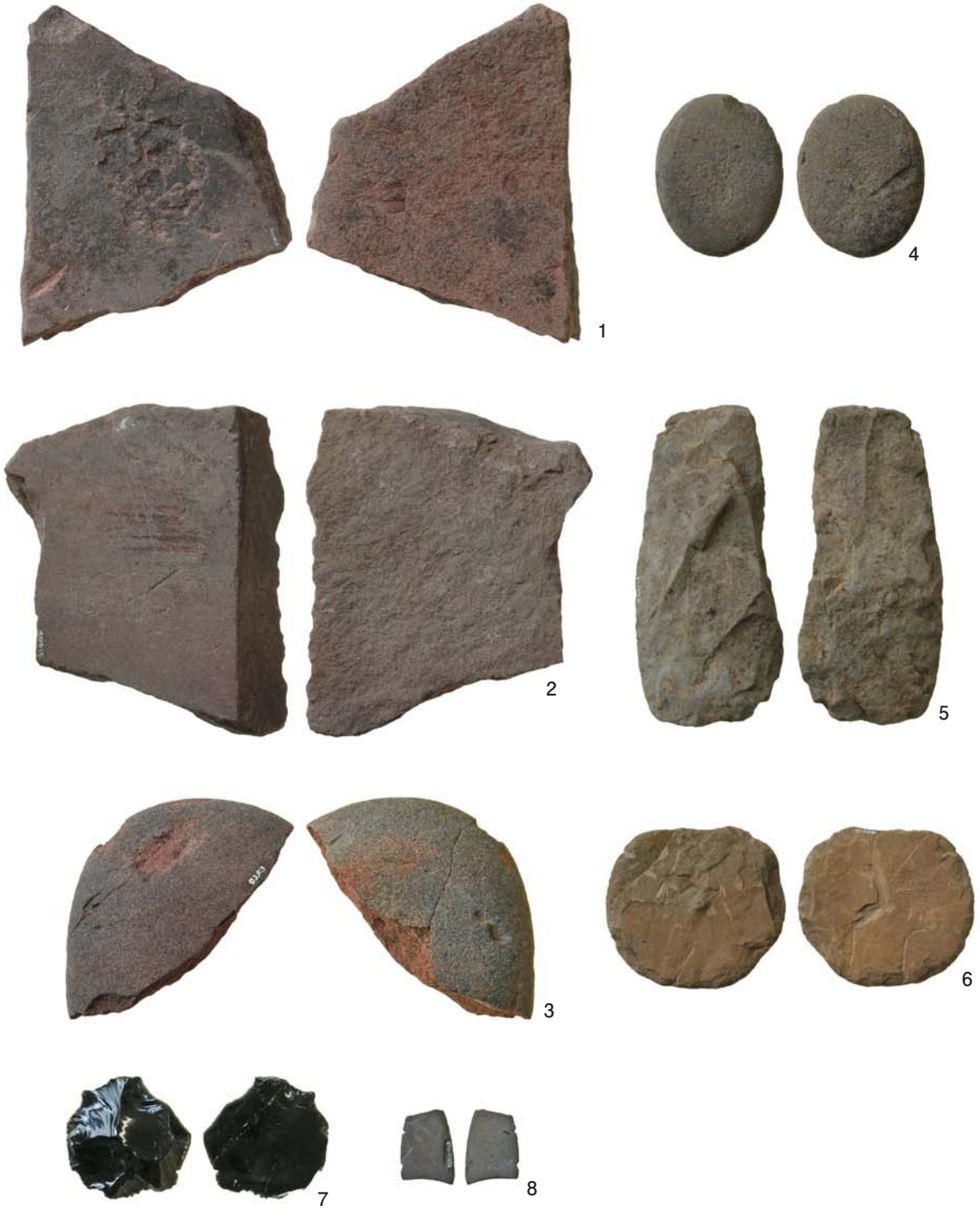
整地作業

土坑内出土遺物

甕棺墓内出土土器

図版12

出土土器・陶磁器



出土石器

報告書抄録

ふりがな	おおぞのいせき
書名	大苑遺跡
副書名	大苑地区県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	荒木　伸也・本多　和典
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859－2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地　TEL0957－73－6705
発行年月日	西暦2018年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
おおぞのいせき 大苑遺跡	みなみしまばらし 南島原市 ありえちょう 有家町	42214	072	32° 40′ 44″	130° 20′ 08″	20021015 ～ 20021107 20051011 ～ 20051130	286㎡ 509㎡	農業基盤 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大苑遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 中世 近世	ピット 柱穴列 甕棺墓 土坑墓 集石遺構	土器 石器 陶磁器	

南島原市文化財調査報告書　第12集

大　苑　遺　跡

2018.9.30

発行　長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　カキモト印刷

南島原市文化財調査報告書　第12集

大苑遺跡

2018

長崎県南島原市教育委員会